

駆け引きラヴァーズ

Nao & Syusei

綾瀬麻結

Mayu Ayase

termity



エタニティ文庫

目次

駆け引きラブアーズ

5

書き下ろし番外編
乱舞ラブアーズ ～カレのためならどんなプレイも!?～

343

駆け引きラブアーズ

一

真冬の凍てつく冷気が、身に染みる。今夜は、特に冷え込みが厳しいようだ。少し立ち止まっただけで、足先がじんじんしてくる。

早く家に帰って、暖房の効いた部屋でかじかむ手足を伸ばしたい……

インテリアデザイン会社で働く高遠菜緒は、夜も更けて人通りの少なくなった路地を小走りで自宅へ向かっていた。そして、一人暮らしをしているワンルームマンションのエントランスに入る。郵便受けを確認するのも億劫で、真つすぐエレベーターに乗り込む。目的の階に停まると、軀を縮こまらせ、いそいそと共用廊下を進んだ。

今日はバレンタイン。恋人のいる同僚たちは就業時間内に仕事を終えると、我先にと会社をあとにした。彼氏のいない菜緒は当然早く帰る必要はなかったが、早々に帰宅することに決めた。

上司はまだ残業していたので多少気が引けたものの、義理チョコを渡した時「今日はバレンタインですか。それで皆、妙にそわそわしていたんですね」と言ってくれたので、

菜緒が早く帰っても特に何も思わないだろう。

そうして会社を出たところで、同期から電話が入った。女子会の誘いだ。断るのも悪いと、待ち合わせのレストランへ行っただが、店員に案内されて入った個室には、バレンタイン合コンがセッティングされていた。

「人数合わせだったとしても、合コンは嫌いだって、言っただのに……」

彼氏が欲しくないわけではない。今年で二十六歳になるし、恋人と楽しそうにしている友人たちを見るたびに羨ましくなる。そう思いはするものの、恋人を探すために合コンへ参加するのは少し違う気がして、心が躍らなかつた。夢を見ているわけではないが、やはり自然の出会いがいい。

自宅マンションの共用廊下を歩きながら、菜緒は力なくため息をついて眼鏡をはずした。酷く痛む目頭を冷たい指で揉む。普段はコンタクトをしているが、アルコールと人に酔ったせいで目の奥が痛くなり、レストランで眼鏡に替えたのだ。ただ、眼鏡は菜緒には合わず、コンタクトより目が疲れてしまう。今もその影響を受けていた。だから、眼鏡をかけるのは嫌いだつた。

さらに強く瞼の上を押した時、どこかのドアの開く音が聞こえた。顔を上げると、数戸先のドアから人影が覗いている。輪郭はボヤけていても、そこに立つ女性が誰なのかはわかつた。

「律子さん！」

「菜緒ちゃん、お帰り！」

彼女は、五十嵐律子。独身生活を満喫している三十七歳で、モデルのように美人なキャリアウーマンだ。商社マンの恰好いい彼氏もいる。

ただ、その彼氏はかなり嫉妬深いが……

五十嵐は仕事で全国を飛び回っているので、隣人とはいえなかなか菜緒と会う機会はない。にもかかわらず、一年前に引越してきた菜緒が彼女に挨拶をして以来、何故か意気投合。まるで菜緒を実の妹みたいに可愛がってくれていた。そんな彼女と久しぶりに会えた嬉しさで、菜緒の頬は自然と緩んだ。五十嵐のもとへ向かう足取りも軽くなる。彼女も、菜緒の方へ歩み寄ってきた。

「律子さん、どうされたんですか？ 今日にはバレンタインなのに、彼氏さんは？」

「実は出張中なの。独りで寂しかったから、仲のいい従弟を呼びつけて相手してもらってただけで、二人だと全然面白くなくて……。それで菜緒ちゃんの帰りを待ってただ。ねえ、うちに寄ってよ。従弟を紹介したいし」

「えっ？ 今からですか!？」

正確な時間はわからないが、レストランを出た時間から考えると、既に二十三時近くになっているはずだ。遅い時間であっても二人の間ではなんでもないが、彼女の従弟は

どう思うだろう。

さすがにちよつとまずいよね——と菜緒は申し出を断ろうとした。だがその前に、五十嵐が口を開く。

「いいじゃない、おいでよ！ あたしが言うのもあれだけど……、従弟、めっちゃくちゃカッコイイよ」

五十嵐に手首を強く引つ張られた。手がかじかんでいたせいで、菜緒の手から眼鏡が落ちる。

「あっ！」

菜緒は息を呑み、ゆっくり視線を下げる。五十嵐の方へ引き寄せられて足を踏み出したそこには眼鏡があり、それを思い切り踏ん付けていた。菜緒の眼鏡はフレームの形を変え、レンズははずれている。

「……嘘。ご、ごめん、菜緒ちゃん！ あたしが無理に引つ張ったせいだ。どうしよう！」

いつも何事にも動じず、おおらかに構えている五十嵐が、動揺している。初めて見る彼女の様子がおかしくて、菜緒は小さく笑った。

「気にしなくても大丈夫ですよ。普段はコンタクトなので、支障はありません。それに、その眼鏡の度数も合ってなかったんです」

フレームを拾い上げた五十嵐が、申し訳なさそうに菜緒を窺った。「でもさ、やっぱりあるのとないのとは違うでしょ？　ねえ、家に替えはある？」
「替えはありませんけど、家では普段眼鏡をかけていないので平気です。気にしないでくださいね」

実際はテレビやパソコンを見たり、雑誌を見たりする時は眼鏡が必要だ。でも、それはわざわざ言うことではない。

菜緒はなんでもないと笑みを浮かべ、五十嵐からぐにやりと曲がった眼鏡を受け取ると、ハンカチに包んでバッグに入れた。

「それじゃ、あたしの納得がいかない。弁償させて。一緒に買いに行く。……あっ、ダメだ。また出張でしばらく帰って来られないんだった。そうだ……従弟を付き添わせる。そして、あいつに美味しいものを奢らせる！」

「律子さん、本当に大丈夫です」

菜緒が頭を振ったその時、五十嵐の家のドアが大きく開いた。驚いてそちらへ目を向けると、背の高い人物が顔を覗かせていた。

「律子、何騒いでるんだ。いつまでも廊下に——」

男性の不機嫌そうな声。だが、その言葉は徐々に小さくなっていった。この距離では、菜緒は彼のボヤけた顔しか見ることができない。それでもモデル並みに背が高く、すら

りとした体軀たぐをしているとわかった。そんな彼の目が、菜緒に向けられていると感じる。そう思っただけで、菜緒の胸が少しずつ高鳴り出した。社会人になって初めて我が身に起きた反応に驚きつつも、彼のボヤけた姿に見惚みとれてしまう。菜緒がじっと立ち尽くしている、五十嵐が苛いら立たしげに息をつき天を仰あおいだ。

「柀いぼせ生、いきなり出てこないでよ。せっかくながら……もう！」

五十嵐は地団駄じだんだを踏みそうな顔付きだったが、すぐに我に返ってにつこり笑い、菜緒の肩を抱いて顔を寄せた。

「紹介するね。彼女があたしの隣人で、実の妹のように可愛がってる菜緒ちゃんです。可愛いでしょ！　あたしの仔猫ちゃんなんだ」

ヘアアイロンで毛先を巻いてふんわりさせた菜緒のセミロングの髪に、五十嵐が頬をすり寄せる。

こうやって菜緒を可愛がってくれるのは、五十嵐くらいだろう。

そもそも菜緒は引込み思案な性格で、人付き合いの上手い方ではなかった。それなのに、心の中では誰かに構って欲しいという願望がある。それでいて、いざ近寄られると一歩退き、相手との間に壁を作ってしまう。

まるで、むらつけのある仔猫の如ごとく……

今日のバレンタイン合コンでもそうだった。参加していた男性に話しかけられて内心

嬉しかったのに、積極的な気配を感じると話をはぐらかし、逃げるように席を移動した。そういう意味からすると、確かに菜緒は仔猫だろう。

五十嵐は本当に菜緒をよく見ている。ありのままの自分を受け入れてくれる彼女の存在に、菜緒はふっと頬を緩めた。すると、男性が玄関ドアを開け放したまま部屋の中へと引っ込んだ。

「彼女を誘うなら、俺は……帰る！」

部屋から、そんな声が聞こえてきた。

息を呑む菜緒の隣で、五十嵐が楽しそうに笑い出す。何故そこで笑うのかわからず、おろおろしていると、彼女に頭をポンポンと優しく叩かれた。

「ごめんね、態度が悪くて……。だけど柗生って、いい奴なの。実家を飛び出したあたしを、彼だけがずっと心配してくれてね。あいつの方がいろいろ大変なのに……」

五十嵐が実家を飛び出した理由は、ほんの少しだけ聞いていた。当時付き合っていた彼氏と別れさせるために、親から政略結婚をさせられそうになったという。いつの時代のお嬢様だと思っただが、彼女の悲しそうな顔を見て嘘ではないとわかった。その彼氏とは結局別れたそうだが、両親の言いなりにはならないと、彼女は今も頑張っている。

そんな五十嵐を、ずっと従弟の彼が支えてくれてたんだ……

初対面の菜緒に対する態度はいかがなものかと思うが、その話を聞いて彼の印象が変わった。従姉を思いやる優しさを持っている男性だと思うと、不意に彼に興味が湧いてくる。

彼の方がいろいろ大変って、何かあったんですか？——そう訊ねそうになって、言葉を呑み込んだ。五十嵐とは親しく付き合っているが、彼女の従弟とはまだ会ったばかりだ。興味本位でいろいろ訊いてもいい間柄ではない。

「あの、今日はお邪魔するのを止めておきますね」

菜緒は苦笑いを浮かべつつバッグに手をつ突っ込み、鍵を取ろうとした。だがそうする前に、五十嵐に腕をがっちり掴まれる。

「何を言ってるの？ 柗生はね……ちよつと……ううん、菜緒ちゃんを見てかなり驚いてしまっただけ。そして今、どうしようかとあたふたしてるの」

肩口を揺らして楽しそうにする五十嵐に引っ張られる。躓いて転びそうになるが、足を踏ん張って背の高い彼女を見上げた。

「律子さん!? わたし、今夜は本当に遠慮します。明日も仕事ですし——」

「ダメよ。こんな機会、もう二度とないかもしれないのよ！ しかも、今日はバレンタイン。ふふっ……素敵なことが起こりそうね」

五十嵐は開け放たれたままのドアの中に、菜緒を引き入れた。

「柗生！ 菜緒ちゃんを連れて来たよ！」

五十嵐の部屋には何度も入っているし、家具の配置も熟知している。裸眼のせいで視界はボヤけているが、奥の部屋にあるソファの上で黒い塊が動いたのはわかった。

「じゃ、俺がここにいない必要ないな。帰る——」

「実は菜緒ちゃん、今コンタクトしてないの。しかも、ついさっきあたしが彼女の眼鏡を壊しちゃった。あたしの部屋には何度も入ってるから大丈夫だとは思うけど、細かいところは見えないみたい。柗生も気を付けてあげてね」

さあ、部屋に入って——と五十嵐に背中を押されて、菜緒は心を決めた。ブーツを脱ぎ、彼の機嫌を窺いながら部屋の奥へ進む。だが、キッチンを通り過ぎたところで菜緒の足が止まった。室内から漂う肌をざわつかせる空気に、それ以上進めなくなってしまう。そんな菜緒の肩に、彼女が両手を置く。

「改めて紹介するね。柗生、彼女は隣人の菜緒ちゃん、二十五歳。インテリアデザイン会社で働いています。彼はあたしの従弟の柗生。年齢は三十二歳で……なんと彼も菜緒ちゃんと同じインテリア——」

「おい！」

急に柗生が口を挟んだ。じろりと五十嵐を睨み付けているのが雰囲気伝わってくる。だが、彼女は楽しそうになっこりしていた。

「何よ、別にいいじゃない。柗生もインテリア関係の仕事に就いてるって言うても」

「柗生さんも、インテリア関係のお仕事をされてるんですか!？」

菜緒は思わず訊くと、柗生は言い辛そうに「ああ」とだけ答え、ぷいっと顔を背けた。

「あらら、拗ねちゃった」

「わたしのせいですね。すみません……」

五十嵐の従弟だからこそ、彼にはいい印象を持ってもらいたいと思ったが、上手くいかなかった。しゅんと肩を落とす菜緒の背中を、彼女が優しく撫でる。

「違うよ。柗生はあたしに腹を立てているの。菜緒ちゃんは全然悪くないからね。さてと、お酒の準備しなきゃ! さあ、座って待ってて。柗生、菜緒ちゃんをいじめないでね!」

「あの、失礼します」

菜緒はコートを脱ぎ、白のハイネックセーターとボックスブリーツ型のスカート姿になる。ソファに座る柗生からは一番遠い、ローテーブルを挟んだ向かい側へ行き、そして座った。だが、下手に話しかけて彼を怒らせたくない菜緒は、軀を縮こまらせて顔を伏せる。

「なあ、……本当にボヤけて見えないのか? ……俺の顔も?」

柗生の冷たい声音に身震いしたが、菜緒は彼をそっと窺った。彼は自分の顔の前で手をゆっくり動かし、菜緒の目がそれを追えるか試している。緊張していたはずなのに、

彼の態度がおかしくて、菜緒はぶつと噴き出した。

「ごめんなさい。えっと……まったく見えないうわけではないんです。カメラのピントが合っていないと言えはわかりますか？ 全体がボヤけているだけなので、あの……柗生さんが顔を動かしたり、手を上げたりしているのはわかります」

「そう、なんだ……」

何故か、彼はホツとしたようだ。でもそのまま顎に手をあて、何かを考え込み始めた。しかも、苛立たしげに大きなため息までつく。

菜緒が変なことを言ったのだろうか。思わず笑ってしまったのがいけなかった？ それとも、菜緒が柗生から一番遠い場所に座ったせい？

「あ、あの！ 実は、もっと近づけば顔もよく見えるんです。ただ、相手の顔が見えそうで見えない距離にいるとまじまじ見ってしまう癖があるので、このくらいの距離でいさせてください！」

菜緒は、必死に言い訳した。途端、柗生が大声で笑い出す。楽しそうに肩を揺らして俯いたと思ったら、顔を上げ、上目遣いで菜緒を見る。菜緒にははっきりと柗生が見えているわけではないのに、どうして興味深げに見られていると感じるのだろうか。

「あら、柗生が笑ってる。そうよね、安心すれば誰だって——」

「律子、お前……ずっと知ってたんだな」

「さあ……」

二人が何のやり取りをしているのかさっぱりわからない。だが、五十嵐と柗生の楽しいな雰囲気がちやらに伝わってきて、菜緒の肩に入っていた力がゆくり抜けていった。

「明日は仕事だけど、今日は特別ってことで。いっぱい飲んでね」

五十嵐はローテーブルにお銚子を置いた。さらにきんぴらごぼうや揚げ出し豆腐、糸こんにゃくの明太子和えといった酒の肴も置く。そして、菜緒の斜め前に腰を下ろす。

「わあ！ わたしの大好きな、律子さんのきんぴらごぼう！ 作ってくれたんですか？」

菜緒が歓声を上げると、五十嵐はにつこりした。

「もちろん！ 菜緒ちゃん、いつも美味しいって食べてくれるからね。それに比べて、柗生ったら、これまで一度も美味しいって言ってくれないんだよね」

「へえ……、律子がそういう風に言われたがっているとは知らなかったな」

「その考えがダメなんだって、いつも言ってるでしょ。本当、女心を理解できない男」

五十嵐はお銚子を持ち、菜緒と柗生の杯にお酌をする。続いてお銚子を受け取った彼は、腰を浮かして前屈みになり、五十嵐の杯に注いだ。

柗生との距離が縮んだせいで、男らしいムスク系の香りが菜緒の鼻腔をくすぐる。思わず彼に目を向けた瞬間、菜緒の心臓がドキッと高鳴った。輪郭がほんの少しだけ鮮明になり、その雰囲気から彼が人を惹き付ける魅力のある男性だとわかったからだ。

長めのウルフカットの黒髪を無造作に掻き上げるだけで、柗生の野性的な男の色香が漂ってくる。お銚子を持つごつごつした骨ばった手、太い首、男らしい喉仏が陰影で下にも動く様子にさえ目を奪われる。

柗生の顔をじっと見つめていると、彼がいきなり菜緒に視線を向けた。

「おい、人をまじまじと見ないために俺から離れたって言うてたくせに、話が違うだろ」

柗生は菜緒の方へ手を伸ばすと、額を指で弾いた。

「痛っ！」

叩かれた額に手を置いて顔を上げた時には、彼は既にソファに座り直して距離を取っていた。再びその姿がボヤけるが、彼が顔をしかめているように感じる。

「落ち着いてよ、柗生。顔がはつきり見えななんだもの。気になるのも仕方ないじゃない。それより、乾杯しようよ。あたしの大好きな菜緒ちゃんを柗生に紹介できたことに、乾杯！」

「……乾杯」

そんな音頭でいいのかと思いつつも、菜緒は五十嵐に合わせて杯を上げ、グイッと飲んだ。食道が燃えるように熱くなり、冷えた臓器を温めていく。フルーティでありながらさっぱりした後口に、菜緒は満足の声を漏らした。

「おい！」

柗生は明らかに乾杯する気分ではないようだが、しばらくすると小声で「乾杯」と言うて杯を口元へ運んだ。五十嵐はにこにこしながら、酒の肴を食べては日本酒を飲む。

「そういうえば、菜緒ちゃんはどこへ行つたの？ もしかして、デートじゃないわよね？」

話を振られた菜緒は杯をテーブルに置き、空になった五十嵐の杯に酒を注いだ。

「違います。社会人になって以降、彼氏なんてずっといないって知ってるじゃありませんか」

「うん、だからね……、菜緒ちゃんに柗生を紹介したんだけど」

「おい！」

しれつと言う五十嵐にすかさず彼が口を挟むが、彼女は気にする様子もない。上体を倒し、菜緒に顔を寄せてきた。

「それで？」

「あつ……えつと——」

菜緒は、バレンタイン合コンに参加していた話をしようとした。その時、先ほどまでそつぽを向いて杯を傾けていた柗生が、いつの間にか菜緒を窺っている気が付き、出かけた言葉を吞み込む。こっちに來るなと線を引きかれたはずなのに、意識を向けてもら

えると思っただけで嬉しくなってしまった。菜緒の口元は自然とほころぶが、すぐに奥歯を噛み締めて、唇を引き結んだ。

柗生が菜緒を見ているのは、ただ単に、話をしている人に目を向けただけだろう。

こんなに男らしくて素敵な人が、わたしなんかに興味を持つはずなもの——自嘲気味に小さく笑って、菜緒は五十嵐に目を向けた。

「実は、バレンタイン合コンに参加しました」

「ええ!? 何それ! 菜緒ちゃん、そういうのは嫌いって言ってたじゃないの!」

「律子ややつてるのと、一緒だと思っただけだよ」

五十嵐はキッと柗生を睨み、菜緒に詰め寄る。

「それで? どうなったの!?!」

「何も……です。そもそも、合コンとは知らずに呼ばれて……。うん、義理参加です」

「良かった! たとえ義理とは言え……いい人はいなかったってことだもんね?」

いつの間にか腰を浮かして前のめりになっていた五十嵐が、ホッと胸を撫で下ろして座り直した。

「凄くしつこい人もいましたけど、わたしは逃げちゃいました」

「彼氏、欲しいんだ?」

会話に、柗生が割って入ってくる。彼は片肘を膝に置いて前屈みになり、杯を傾けな

から菜緒に面を向けていた。

「そう、ですね。とは言っても、誰でもいいわけじゃないです。出会いの場も大切だとは思っけど……こう、自然な出会いの中で、会った瞬間に胸をときめかせられたらというか」

「少女趣味……」

柗生の呟きに、菜緒の軀が羞恥でカーツと熱くなった。彼に言われなくても、菜緒自身恋に幻想を抱いているのはわかっている。でも、どんな人と出会っても心が弾まない。素敵な人と出会っても、何故か皆良い人で終わってしまう。だから、出会った瞬間に胸がドキッとするような出会いをしたかった。

そして今、妙に菜緒の心をざわつかせる男性が目の前にいる。しかし、柗生は菜緒をあまり意識していないようだ。

きつと五十嵐の可愛がる隣人だから、仕方なく付き合っているという感じだろう。

少し悲しいかな……

小さくため息をついた時、五十嵐が菜緒の肩を抱いてきた。

「柗生の言葉なんて気にしちゃダメ。あいつの周囲にいる女性って、なんて言うか……計算高い女しかいないの。だけど、打算で男を作らない子もいるんだと知って、今新鮮な気持ちになっているんだと思う。だよ、柗生?」

「へえ、律子は俺の気持ちが変わるのか……」

抑揚のない、棒読み口調で言う柗生。なのに五十嵐は何故か上機嫌になる。

「やっぱり菜緒ちゃんを柗生に紹介して良かった！」

アルコールでほんのり頬を染める五十嵐は、空になっている菜緒の杯にお酌をし、自分の杯には手酌でたつぷり注いだ。

「柗生にはね、菜緒ちゃんのように純粹な女性もいるんだって知って欲しかったんだ。

まあ、本人が自暴自棄になって荒れた生活を送ってるから、そういう女性と出会うのは無理だったんだけどね」

「あの……わたし、純粹ですか？ 知ってのとおり、結構ややこしい性格をしていますけど」

真剣に訊ねる菜緒に、五十嵐は優しげに微笑んだ。

「菜緒ちゃんはさ、あたしの周りにいたどの女性とも全然違う。それがあたしをホッとさせてくれるの。心を隠さず、真つすぐな気持ちで向き合ってくれる菜緒ちゃんの存在に助けられてる。だからね、あたしはそういう菜緒ちゃんを柗生に紹介したいって思ったんだ」

「はいはい……」

柗生は気怠げではあるものの、五十嵐の言葉にきちんと受け答えをしている。たった

一言だが、柗生が従姉を大切に扱っているのが伝わってきた。

ああ、やっぱりこういう男性っていいな……

「もう！ せっかく菜緒ちゃんを紹介したっていうのに、その言い草は何よ！ でもまあ……いっか。これでお互い顔見知りになったわけだし」

楽しそうに笑うと、五十嵐は話題を変え、出張の話をはじめた。警戒心を解いてきた柗生も話に加わり、ほんの少しだけ二人の仲間に入れたかなと、菜緒の頬が緩む。

その時、室内にチャイム音が響いた。マンションのエントランスで押すチャイムの音だ。

「うん？ ……誰も来る予定なんてないんだけど」

五十嵐が立ち上がるが、酔いが回って足元がおぼつかない。

「律子さん!？」

菜緒は反射的に立ち上がり、五十嵐の軀を支えた。

「わたしが、見ましようか？」

「いや、俺が見てこよう」

柗生がソファを立ち上がる。だが、五十嵐が「大丈夫だから」と、彼を制した。そうしている間にも、チャイム音は鳴り響く。

「二人とも座って待ってて」

五十嵐がにっこりして歩き出すが、やはり足元はふらついていた。

「はいはい、誰かな？」

呂律は回っているので大丈夫だろう。そうは思うものの、菜緒は迷っていた。五十嵐が足を躓かせたら助けられるよう傍へ行くべきか、それとも言われたとおり座って待つべきかとおろおろする。やっぱり彼女を支えようと決めた時、柗生に「おい」と声をかけられた。

「座ってれば？ 律子が大丈夫って言ってるんだ。そんなに心配する必要もないだろ？」
菜緒は頭を振った。

「律子さん、素直に人に頼るような性格じゃないから……。そういう時に限って、言葉と態度で強気に振る舞う癖があるんです。だから、もし律子さんのそういう姿を目にしたら、わたしが彼女の助けになりたいと思って……」

菜緒は、既にソファに腰を下ろしていた柗生の方に顔を向けた。一瞬、彼は呆気に取られたようだが、やがてゆっくり手で口元を覆い、菜緒から顔を背けた。

「あ……、なんか、この展開ってヤバイかも……」

「何もヤバくないですよ！」

「いや、そういう意味じゃ——」

柗生がそう言った直後、五十嵐の「えっ？ ええっ?！」と叫び声が響いた。菜緒は

ハツとして、ドアの傍に立つ彼女を見つめた。彼女は硬直して、モニター画面を見つめている。五十嵐のもとへ駆け寄ろうとした菜緒だが、一步踏み出したところで柗生に肩を掴まれた。

「菜緒はそこにいるんだ」

柗生の険のある声と、初めて呼び捨てにされたことに驚き、菜緒は真横に立つ彼を振り仰いだ。初めて間近で彼の顔を見て、ドキッとした。くつきりとした二重の目、鋭い光を宿す双眸、真つすぐな鼻梁、そして色っぽい唇。見覚えはないのに、どこかで彼に会ったような感覚に襲われる。

こんな、芸能人並みに覇気の漲る男性と出会っていれば、覚えているはずなのに……
ポーツと柗生の顔を眺めていると、彼が菜緒の背中を軽く叩いた。

「いいか、動くなよ」

柗生は菜緒に背を向け、早足で五十嵐の傍へ寄る。

「律子、どうした？ ……あっ！」

モニター画面を見るなり、柗生が身を翻してソファへ戻ってきた。彼は菜緒には目も向けず、部屋の隅にかけてあった黒いダウンジャケットを掴む。

「えっ?」

柗生の行動に驚きつつ律子に目を向けると、彼女がモニター画面の応答ボタンを押し

たところだった。

「ご、ごめん。ちよっとバタバタしてて。あの、今日は来られないって言ってたのど
うしたの？ あたし、びっくりしちゃった。あつ、えつと……そんなことないって。今、
開ける……」

そう言つてボタンから手を離れた途端、五十嵐がすぐに振り返つた。

「彼氏が来た！ もうなんなのよ……。出張だつて言つたのに！」

五十嵐の言葉に、菜緒は柗生を見た。彼はセーターの上にダウンジャケットを羽織り、
真つ先に玄関へ向かう。五十嵐が彼を追い、菜緒もあとに続いた。柗生はオイルレザー
のウエスタンショートブーツを履いてドアを開ける。だが、静かな廊下にエレベーター
が到着する音が聞こえると、俊敏にドアを閉めた。

「駄目だ、逃げられない！」

柗生の言葉に、菜緒は急いで部屋へ戻つた。ソファの隅に置いてある籐かごで編まれた小
さな籠かごを引き寄せ、そこに彼が使つていた食器を入れる。ブーツを脱いで部屋へ戻つて
きた彼にそれを渡すと、柗生は何も言わずに受け取つた。

柗生は知っているのだ。五十嵐の恋人が極端に嫉妬深いのを……

顔を上げると、菜緒を見ていた柗生が頷いた。菜緒が何も言わなくても心が通じる感
覚に、胸が躍り始める。

今はそんな風を感じている余裕はまったくないのに……

「嫉妬さえなければ、本当にいい奴なのに！」

「だから何回も言っているだろ。律子が浮気するかもしれないと疑う男なんて、さつき
と切れつて」

「今は、その話はいいから」

言い争いを始めたが、すぐに柗生が我に返つて口を噤つぶんだ。

「あの、これからどうします？ わたしはいいとして、柗生さんは……」

菜緒は柗生を見る。彼がイライラしているのは、肌で十分感じられた。彼も気が気で
ないのだろう。

五十嵐の彼氏は、普通に人付き合いいい素敵な男性で、彼女をととても大切にしてい
る。ただ、かなり嫉妬深い。裏を返せば、恋人を愛しているという意味なのかもしれな
いが、それは度を超えていた。

彼は、たとえ親族であっても、彼女の部屋に男性が入るのを許さない。会う必要があ
るなら、人の目のある公共の場でと強く言われているらしい。

なのに、彼女は、従弟いとこの柗生を部屋に上げている。もし現場を見られでもしたら、
いったいどうなるだろう。

五十嵐の彼氏は、菜緒と一緒にいたと知っても納得しないに違いない。そういう男性

なのだ。

「と、とりあえず、柗生はベランダに隠れて——」
五十嵐がそこまで言って、菜緒に顔を向ける。

「ねえ……。菜緒ちゃんとこのベランダとうちのベランダってつながってたよね？ 柗生をそっちのベランダへ行かせるから、菜緒ちゃんの家でちよつとの間だけ、匿かくまってくれない？」

「えっ？ わたしの家、ですか!？」

「お願い！」

五十嵐が顔の前で手を合わせ、頭を下げる。こんな風に頼まれたらイエスと言いたくなるが、さすがに柗生を一人暮らしの部屋へ入れるのは躊躇ちゆうちゆしてしまう。五十嵐が従弟に信頼を寄せているのは知っていても、菜緒にとっては今日会ったばかりの男性。そんな彼を家へ招き入れるなんて、無理だ。

「あ、あの……」

菜緒の声が自然と強張こわばる。すると、顔の前で手を合わせていた五十嵐は、手を静かに下ろした。

「菜緒ちゃん——」

その時、玄関のチャイム音が部屋に響いた。さつと三人が真顔で目を合わせる。

「律子。こうなったら、俺が彼氏の嫉妬しつとを全面的に受け入れてやる。それでもし、俺が殴られて歯が折れたら、お前に請求書を送るからな」

「柗生……、うん、わかった」

自分の恋人が乱暴な振る舞いをする可能性を堂々と認める彼女に、柗生は呆れ顔で小さく笑った。

「容赦ないな。でも、まあ……こうなることは、俺も予想するべきだった」

「ごめん……、ごめんね柗生」

「わかっている。それほど律子が好きってことだろ。俺はあそこまで誰かを好きになった経験がないから……彼の行動は理解できないが」

「柗生が本気の恋をしたらどうなるか、ちよつと見物みぶつだね」

五十嵐は力のない小さな声で笑った。その後は何も言わなかったが、再度チャイム音が部屋に響くと、菜緒たちに背を向けて玄関へ歩き出した。

本当にこれでいいのだろうか。彼女だけでなく柗生も、菜緒を責めない。それどころか、彼は、従姉いとこの彼氏に殴られる覚悟を決めた。

菜緒だけが逃げようとしている。これでは、いつもと変わらない。怖気おそけづいては逃げ、それでいてあとで悩むのもう嫌だ。

前を向きたい。大切な友人の助けになりたい！

「来てください！」

ここにきて初めて、菜緒は自分の意思で柀生の腕を掴んだ。

「おい？ ……菜緒？」

「菜緒ちゃん？」

玄関に行きかけていた五十嵐が踵を返してくるのが、目の端に映る。だが、菜緒は柀生だけに意識を向けた。

ベランダへ出るガラスドアを開け、柀生をそこへ押しやる。

「ここから隣のベランダへ行ってください。わたし、部屋に戻ったら鍵を開けますから！」

小声でしつかり伝えると、柀生が菜緒に手を伸ばした。大きな無骨な指で、頬を撫でられる。

「……ありがとう」

柀生の仕草にドキツとした。男性に慣れていないため、触れられたら反射的に逃げる癖があるのに、彼から目を逸らせない。ボヤけていない彼の顔を見たいという衝動に駆られる。

「じゃ、向こうで待つてる」

名残惜しげに柀生の手が離れる。彼は菜緒に背を向け、隣のベランダとの境目にある

間仕切りのパーティションへ向かう。そして膝を折り、手にしていた籠を置いた。

「菜緒ちゃん？ 本当にいいの？」

五十嵐の声に我に返り、菜緒はベランダのガラスドアを閉める。

「はい。律子さんが柀生さんを信頼しているのはちゃんとわかりました。最初は尻込みをしてしまったけど……律子さんを、彼を助けたいって、わたしが思ったんです」

「そっか……。ありがとう。なんか、嬉しいな。あのね、柀生はぶつきらぼうで、愛想も良くないけど、根は優しい、とてもいい奴だから」

菜緒のコートとバッグを掴んだ五十嵐が、菜緒の手にそれを渡す。

「とは言っても、あいつだって立派な男、野獣。もし、菜緒ちゃんの意思に反して、柀生が変な真似でもしそうになったら思い切り殴っていいからね。あたしが許す！」

五十嵐の言葉に、菜緒は「はい」と微笑んで頷いた。

「よし！ じゃ……よろしくお願いします」

二人で玄関へ向かい、五十嵐が玄関の鍵を開けた。

「なんでドアを開けるのに、こんなに時間がかかって——」

五十嵐の彼氏は強い口調で問いかけたが、菜緒を見て言葉を呑み込む。

「君はお隣の……えっと、高遠さん？ 律子の部屋に来ていたんですか？」

「こんばんは。遅い時間なのに、お邪魔していました。律子さんが……わたしのために

出張先でいろいろ仕事着を買ってきてくれたので……試着させてもらっていたんです」
 アパレル関係の仕事に就く五十嵐は、出張先で菜緒によく服を買ってきてくれる。その時は彼女の家で試着するので、これは嘘ではない。

今日は全然違うが……

「菜緒ちゃん、またしばらく出張で家を空けるけど、帰ってきたら遊ぼうね」

「あっ……はい！ わたしに似合う服があったら、またお願いします」

五十嵐に告げると、菜緒は彼女の彼氏と入れ替わって共用廊下へ出た。彼女の玄関ドアが閉まるとバッグからキーケースを取り出し、家の鍵を開けて乱暴にドアを閉める。コートとバッグを放り投げ、電気を点ける間も惜しんで窓辺に駆け寄り、ベランダの鍵を開けて外へ出た。

「柊生さん！」

小声で柊生の名を呼ぶが、ベランダに彼の姿は見当たらない。もしかしてベランダの手すりを乗り越える時に足を滑らせただけではと心配になり、菜緒は慌てて手すりから身を乗り出した。だが、眼鏡すらかけていない菜緒に、彼の姿なんて見えるはずもない。恐怖で駆が震えたその時、何か目の端で黒い物体が動いた。

「な、何!？」

菜緒は驚きつつも、パーティションへ近づく。物置の傍で動くその物体の傍らには、

柊生の着ていたダウンジャケットがあった。さらに顔を寄せて初めて、彼が菜緒に足を向ける形でベランダに這いつくばっていると気付いた。

「しゅ、柊生さん？ あの、大丈夫ですか!？」

菜緒は柊生の足元にしゃがみ込み、恐る恐る手を伸ばして彼の足に触れた。

「……っ！」

柊生は、菜緒に返事すらしない。ただ、何かをしながら苦しそうな息を零している。どうすればいいのかとおろおろしていると、彼は軀をゆっくり後退させ始めた。

かすかに食器のぶつかり合う音が響く。上体を起こした時、柊生の手には食器の入った籠があった。

それは、菜緒が彼に渡したものだ。確か彼は、籠をパーティションの傍に置いていたはず。だが、無理な体勢でそれをこちら側へ引き入れたところを見ると、スムーズに持ってこられなかったのだろう。

「……悪い。少し、手間取った——」

「おい、これは男の残り香じゃないのか？ ……もしかしてこの部屋に誰か男を連れ込んでたんじゃないだろうな？ おい、何故、そんなにベランダを気にしているんだ？ もしや、ベランダに!？」

ベランダに近い場所で声を上げているせい、隣室の話し声ははっきり耳に届いてき

た。しかも、五十嵐の彼氏はベランダに意識を向けている。このままここに座り込んでいるのは良くない。この場を立ち去ろうと、菜緒は柀生の腕を掴んで部屋に促そうとするが、一足遅かった。

「ちよっと！」

ベランダの鍵を開ける音が聞こえた。ハッと息を呑む菜緒の前で、柀生は手にしていた籠を脇へ押しやる。そして菜緒に手を伸ばし、いきなり抱きついてきた。びっくりした菜緒は、思わず上体を退いてしまう。それがいけなかった。

柀生の勢いも重なり、菜緒はそのまま彼と一緒に後ろへ倒れてしまった。

「悪い！」

「い、いえ……」

柀生に覆いかぶさられる体勢にどう反応すればいいのかわからず、声が詰まる。なのに彼の重みと温もり、熱い吐息を受け、菜緒の軀の芯がじんわりとした熱を持ち始めた。心臓が早鐘を打ち、呼吸のリズムも乱れていく。

「……菜緒って、意外と——」

柀生が何かを言いかけたと同時に、隣のベランダのガラスドアが開く音が響いた。

「誰かいるのか!？」

「いないって……。ほらっ、誰も……」

「いや、確かに何か音がした」

「あっ、ちよっと、何考えてるの？ そっちは菜緒ちゃんのもの！」

わたしの、何？ もしかして隣から覗こうとしている!? ——菜緒の軀が硬くなる。

すると、柀生が菜緒を庇うように頭を掻き抱いてきた。

「何言ってるんだ。もし強盗とかだったらどうするんだよ。……えっ？ 律子、高遠さんが男に！」

「男!? ちよっとそこ退いて! ……あら。菜緒ちゃんってば、彼氏が来てたんだね。それで、早く家に帰りたくてうずうずしてたんだ」

彼氏? 早く家に帰りたい?!

最初こそ何を話しているのかわからなかったが、すぐに五十嵐がこの光景を利用しようとしていると気付いた。おずおずと手を動かして、柀生の背に腕を回す。

「ご、ごめんなさい、律子さん。その、素直に言えなくて……」

柀生は五十嵐たちに背を向けたまま軀を起こし、腰を上げた。そして、菜緒を引っ張り立たせてくれた。

「ありがとうございます」

お礼を言っつて少し距離を取ろうとする。だが逆に、柀生が菜緒を引き寄せるように腰を抱いてきた。しかも、彼の指がそこを動き始める。親しげな愛撫に、菜緒の顔が紅潮

していく。恥ずかしくて軽く俯いた時、五十嵐のクスクス笑いが響いた。「なんだ、そっか。男の残り香って、菜緒ちゃんについてたんだね。あたしは気付かなかったけど、男ってどうしてそういうのがわかるのかな？」

「それは、お前があやしい態度を取ったからだろ！」

「だって——」

二人が言い争いを始める。でも、先ほどまでであった剣呑さは薄れ、その声音は甘い色を帯びていた。菜緒はホッと胸を撫で下ろした。

二人の会話に入り込みたくはない。でも、このまま黙って部屋に入るわけにもいかず、菜緒は五十嵐たちに「あの！」と声をかけた。

「お騒がせしてしまつてすみません。ご迷惑をおかけしました」

そう言つて、菜緒は軽く頭を下げた。

「菜緒、もういいだろう？ 部屋へ入ろう」

ここで、今まで黙っていた柊生が甘い声で言い、菜緒の肩を抱いてきた。そして、柔らかな髪に手を差し入れて梳く。

「悪い……」

柊生が菜緒に囁いた。何かと問う前に、彼の湿り気を帯びた吐息が唇に触れた。そこで初めて、彼が距離を縮めてきたのがわかった。

「柊生さ……っんう！」

顔を傾けた柊生に唇を奪われる。彼は優しく唇を動かし、ついはみ、宥めては、柔らかな菜緒の唇に舌を這わせた。軽く触れ合わせるキスではない。まるで愛しいと言わんばかりの口づけに、周囲の雑音が消えていく。

菜緒の下腹部奥が、じんわり熱を持ち始める。いつの間にか柊生を深く受け止めるように、顎を上げていた。そんな菜緒の背に、柊生の腕が回される。さらにきつく引き寄せられると、彼の舌が差し込まれた。

「……んくっ！」

舌を絡ませられ、吸われ、いやらしく蠢かせてくる。こんな大人のキスは初めてだった。

いつもの菜緒なら、親しくない男性に強引に口づけをされたら、絶対に拒んでいる。でも相手が柊生となると、何故か嫌悪感はなかった。抱きしめられる腕の力、体軀から発散される熱に酔わされていく。

もつと、もつと深いキスをして——そう請い願つた時、キスは唐突に終わりを迎えた。唾液で濡れた唇に冷気が触れ、ぞくぞくした感触を引き起こされる。

「……さあ、行こう。俺たちの夜が始まる」

柊生に促されるものの、足が別物になったようで動かない。今までどうやって歩いて

いたのかと戸惑うほどだ。

菜緒は柀生に腰を支えられて部屋に入った。彼は後ろ手でガラスドアを閉めると、そこでやっと、菜緒に触れていた手を脇へ下ろした。続けて、彼は遮光カーテンを乱暴に引き、外の灯りを遮断する。

菜緒は部屋の真ん中に立ち、口づけでぴりぴりする唇に触れながら瞼を閉じた。

どうして柀生とキスをする流れになったのか思い出せない。でも彼の傍にいと、これまでにないほど心が躍り、心臓が凄く速さでリズムを刻んでいく。パニックで目が回りそうだ。

早く気持ちを落ち着けて、自分を取り戻さなければ……

菜緒は深呼吸して目を開け、暗闇に包まれた部屋を見回した。

「あつ、電気を点けなきゃ……」

柀生の傍を離れて電気のスイッチを入れようとすると、動き出す前に柀生に手首を掴まれた。

「電気は点けなくていい。いや、そうだな、間接照明にしてくれないか？」

「ど、どうして、間接照明なんですか？」

顔の見えない柀生を振り仰ぐ菜緒に、柀生が気怠げに大きなため息をついた。

「一人暮らしの女性の家に恋人が来てる。しかも深夜にだ。これから恋人同士が仲良く

しようって時に、煌々とした灯りを点けるのは不自然だろ？ 薄暗い部屋にしておけば、俺たちがいい雰囲気になってると律子の彼氏も思うはずだ」

「あつ、なるほど……。そういうことなんですな」

菜緒の頬は、羞恥で染まった。柀生の言わんとする意味を、やっと察することができた。

それは、男女がベッドで愛を確かめる行為……

裸になった菜緒と柀生が軀を重ねて、激しく互いを欲する光景が脳裏に浮かぶ。それを消すように、菜緒は激しく首を横に振った。

「……じゃ、あの、間接照明にしますね」

声の上擦るのを隠せないまま、菜緒はゆっくり壁際へ歩き、間接照明のスイッチを押した。ほんやりとしたオレンジ色の灯りが天井に反射して、温もりのある空間に包み込まれる。

いつもなら暖色系の灯りに包まれて、リンパケアや柔軟体操をしてリラクセスした時間を過ごすのが、この状況は勝手が違う。男性を入れた経験のない部屋に、初対面でありながら唇を許した柀生がいるからだろう。彼と二人きりだと思つくと、菜緒は自然と身震いした。でもそれは怖さというよりも、彼と同じ空間にいられる喜びのようなもの。

ああ、もっと柀生さんのことを深く知りたい——高鳴る胸に手を置き、速まる鼓動音

に耳を傾ける。しばらくじっとしていたが、気持ちが悪く落ちて着いてくると肩越しに振り返った。菜緒に面を向けている柗生に微笑みかける。

「ソファがなくてすみません。好きなどころに座っていてください。あの、お酒は……もういいですよ？ 日本酒を結構いただきました。……お茶、淹れますね」

「大丈夫か？ あまり見えてないんだろ？ 俺も手伝おうか？」

キッチンへ向かう菜緒に、柗生が心配げに声をかける。

「いえ、大丈夫です。自分の部屋で過ごす時はほとんど裸眼ですから」

そう返事してから、菜緒はいそいそと動き、電気ポットに水を入れてスイッチを押した。食後なのでほうじ茶がいいと考え、急須や湯のみを取り出す。お茶請けとして、以前仕事で知り合った方の店で購入した塩こんぶを小皿に添える。準備を終えて振り返ると、彼がベランダへ通じるガラスドアを閉めていた。

「どうかしましたか？」

「ダウンジャケットと籠を、ベランダに置きっ放しだったからさ」

カーテンをもとに戻す柗生の後ろ姿を、ぼんやりと眺める。セーター越しでもわかる、彼の強靱さと、無駄な贅肉のない体躯。あの広い背中に手を回して彼を抱きしめたのを思い返すだけで、また菜緒の心臓が早鐘を打ち始めた。

「……おい、どうした？」

いつの間にか振り返っていた柗生が、ゆっくり菜緒の方へ歩き出す。

「あっ、いえ！ なんでもありません。どうぞ座ってください」

柗生をうっとり眺めていたのを見られてしまった。菜緒はどきまぎして俯きつつ、ローテーブルにほうじ茶を淹れた湯のみとお茶請けを置いた。彼はダウンジャケットと籠を脇へ置き、テーブルの傍に腰を下ろす。

「ただだよ」

柗生が湯のみを持ち、ほうじ茶を啜る。

「うん、美味い。それに、お茶請けに塩こんぶか。ハハッ、どれだけクライアントと仲良く——」

「はい？ ……仲良く、ですか？」

柗生の言っている意味を理解できず、訊ね返す。すると、彼が慌てた様子で頭を振った。

「いや、なんでもない。それより、律子が眼鏡を壊したんだよな？ 予備はないのか？」

「はい。でも普段は……コンタクトを使っているので、支障はないですよ。仕事の合間を縫って買いに行ってください」

「……俺も付き合おう」

付き合う？

菜緒は目を見開いた。大丈夫だと強く頭を振り、顔の前で手を振る。

「い、いいですよ！ 一人で行けますよ！」

「拒まれると、余計に一緒に行きたくなるんだけど」

険のある声音に驚き、菜緒は目をぱちくりさせた。

「あの！ えっと……ごめんなさい。でも、本当に大丈夫です」

一歩近づこうとする男性から、また逃げ出す。本当は柊生の方へ踏み込んでみたい気になっているのに、ここぞというところで自分で線を引いてしまう。

菜緒は、情けない自分の性格に呆れてため息をついた。

「まるで警戒心の強い仔猫だな。……俺に何かを言いたいような顔をするくせに、俺が近づこうとすれば、毛を逆立ててさっさと逃げる」

「そ、そんなことないです」

否定はするものの、柊生の的を射た言葉に、菜緒は居心地が悪くなってきた。もぞもぞ動き、目の前の湯のみに視線を落とす。

「何？ 凶星を指されて腹が立ったか？」

「そういう言い方、失礼ですよ！」

「ずけずけ物を言う柊生に、菜緒は立ち上がって感情的に声を荒らげた。そこで初めて、男性に突っかった自分に気付いて息を呑む。

「す、すみません！ わたし……そういうつもりでは——」

不規則なリズムで打ち始める心臓に痛みが走る。菜緒は苦しくなって臉をギョッと閉じ唇を引き結んだ。部屋はシーンと静まり、いつ柊生が怒鳴り返してもおかしくない空気に包まれていく。だが聞こえてきたのは、柊生の笑い声だった。

「大人しい性格なんだと思っていたが、きちんと自分の気持ちを言える女だったんだな。律子のごとで俺に突っかった時はびっくりしたが、それが菜緒の素の姿か。すっかり騙されたよ」

おかしそうに笑う柊生の声音に、菜緒を咎める色はなかった。

怒っていない？ それどころか面白がっている？

「こういう展開になるなんてな。あの時、ヤバイなと思ったのに……」

「あ、あの？」

「菜緒……、さっきはキスして悪かったな」

突然キスの話をされて、菜緒の下腹部奥がキュッと締め付けられた。生まれた熱がじんわりと波状に広がる感覚に、腰が抜けそうになる。

「い、いえ……。あの時の流れでは、仕方ないとわかっています。まあ、その……酔って交わした……キスだと思っただけです」

今の言葉は嘘だ。菜緒は酔った勢いで、誰かれ構わずキスなんてしない。場を盛り下

げるとわかっていても、キスを織り交ぜたゲームが始まったらそつと退席するのが常だった。遊びで簡単に唇を許したり、抱擁したりは決してない。でも、それを言えば彼は気にするだろう。なんでもないと大人ぶって肩をすくめるのが一番いい。

そう思うのに、柗生がキスの話をしたため、菜緒の唇はそこが第二の心臓になったかのようにずきずきと疼き始めた。菜緒が夢見ていた出会いではないはずなのに、心が彼に囚われていく。

「ふうん、菜緒の心は、あのキスでは動かなかったわけだ……」

「いえ、その逆です。あんなキスは初めてで、わたし——」

菜緒はそこでハツとして口を噤む。柗生の言葉に対し、心の中で思ったことを素直に口に出していた。顔が羞恥で熱くなっていく。

「ち、違っ！」

激しく頭を振るが、足の踏ん張りが利かない。柗生とのキスを思い出して、腰が抜けそうになっていたのをすっかり忘れていた。

「あっ！」

足を横に出して体勢を整えようとしたが、踏み出した場所が悪かった。そこにある柗生のダウンジャケットを踏みつけて、足を取られる。

「キヤツ！」

「お、おい！」

菜緒はつるつと滑り、両腕を開いた柗生の胸に思い切り飛び込んでしまう。軀に衝撃が走るが、彼が後ろに倒れながら抱きとめてくれたお陰で大事には至らなかった。

「すみ……ません！」

安堵の息をついて軀を起こそうとするが、背に回された柗生の手に力が込められて身動きできなくなる。

「あの、柗生さん？」

「あまり驚かさなくてくれ」

柗生はかすれた声で囁き、さらに菜緒を強く抱きしめて肩に顔を埋めてきた。菜緒の慌てぶりを笑うか、それとも危ないと怒鳴られるか、そのどちらかだと思っていただけに、拍子抜けしそうになる。

「えっと……」

戸惑いを隠せないまま柗生に声をかけた時、彼のムスク系の香りがふわっと漂ってきた。鼻腔をくすぐる男らしい香りを胸いっぱい吸い込むだけで、菜緒の軀は歓喜に包まれていく。幸せな温もりは四肢の先まで広がっていった。

柗生にずっと抱かれていたいという思いに駆られたが、菜緒の全体重をかけられた彼は苦しいに違いない。菜緒はフローリングに手をつき、彼の抱きしめる力に反発して上

体をほんの少しだけ上げた。

「わたしは大丈夫です。柗生さんが抱きとめてくれたお陰で、どこも痛く……あつ！柗生さんは大丈夫ですか？ 頭、打っていませんか！」

柗生の顔を覗き込む。これぐらい近ければ彼の目を見られるが、菜緒の影に入る彼の顔はよく見えなかった。不機嫌そうにしているのか、笑っているのか、それさえもわからない。

菜緒はそつと手を伸ばして、彼の肩口に触れた。

「……痛いところはありますか？」

「俺はどこも怪我はしてない。それより、俺の意識は菜緒の……柔らかな胸にいつてる。とても気持ちがいい」

「む、胸!？」

柗生の胸板で潰れている乳房に気付き、取り乱して離れようとする。だが、彼は菜緒の背中に触れる手をわずかに上へ移動し、動きを制した。もう一方の手は菜緒の後頭部に触れ、逃がさないとばかりに力が込められる。

「柗生さん！」

「さつき、俺とのキスは酔って交わすのと同じだと言ったが、酔えば簡単に男に唇を許すのか？ ……今日の合コンでも、見知らない男としてきたってわけか？」

「いいえ！」

柗生の言葉に感情的になって、声を上げてしまふ。そんな態度で彼に突っかかってしまった事実には戸惑い、菜緒は自然と彼の目から逃げた。

「そういう意味で言ったのでは——」

「じゃ、どういう意味？」

柗生は後頭部に触れていた手を動かし、口籠くちごもる菜緒の頬を親指で撫でた。静かな部屋で起こる親密な触れ合いに心臓が高鳴り、互いの息遣いや弾む拍動に意識が向いて口が重くなる。

菜緒は緊張に耐え切れず顔を背そむけようとするが、それは許さないとばかりに強く抱きしめられた。柗生の胸元へ乳房を押し付ける姿勢に、息苦しさがどんどん増していく。

「逃げるな。君は、すぐに顔を背けて逃げようとする。構って欲しいくせに、ほんの少し俺が攻めれば爪を立ててそっぽを向くよな。本当、気まぐれな仔猫だ」

人の心を惑わす低い声で囁ささやかれるだけで、言葉の一つ一つが、とてもエロティックなものに聞こえてくる。そのせいで、菜緒の脳の奥に熱が溜たままっていき、ポーツとしてきた。

「わたし、別に気まぐれというわけでは……」

舌が乾いて上手く言葉を紡げない。それでも信じて欲しいと、菜緒はよく見えない柗

生の顔に目を向けた。

「食いつくのはそこ!? ……やつぱり、俺の知る女たちと違って調子が狂うな。それがまたいいとか……。クソッ、律子にしてやられた感に凄いムカつく。でも、律子だけが悪いんじゃないんだよな。俺の興味ばかりを惹く、お前が悪い」

何もしていないのに菜緒が悪いみたいない方をされて、一瞬ムツとする。だが、それさえも柊生の笑いを誘う。

「何故笑うんですか!」

菜緒は身じろぎして、柊生から離れようとする。その時になって初めて、下腹部にあたる硬い感触に気付いた。その意味がわかった途端、柊生の昂りが触れたそこが火がついたのではと思うほど熱くなっていた。動きたいのに、彼を刺激すると思うと動けない。どうしようと考えれば考えるほど軀が強張り、呼吸の間隔がだんだん狭まる。零れる吐息も、湿り気を帯びてきた。

「……そういう反応も、また新鮮だ」

柊生は菜緒の頬に触れていた指を動かし、浅くなった息を零す唇に沿わせる。

「なあ、まだ答えを聞いていないんだけど? ……酔うと男に唇を許すのか? 演技なら、誰にでもキスするのか? 男の背に手を回して抱き寄せるのか?」

「わ、わたしは……」

菜緒はなんと云えばいいのかわからず、口籠もった。大人の女性らしく、キスなんてどうってことないと言いたいのに、逆に節操のない女性だとも思われなくなかった。

「いったいどうすればいいのだろう。」

「菜緒?」

菜緒はハツとして、柊生を窺った。彼が何を考えているのかはわからない。だが、彼に愛しげに名前を呼ばれると、嘘をつくのではなく、正直な思いを伝えたいという感情が込み上げてきた。

「なんとも思っていない男とキスをするのかしないのか、どっちだ?」

早鐘を打つ心音で息が弾み、菜緒は上手く声を出せないでいた。きちんと話せるか不安もあったが、なんとか気持ち伝えようと声を絞り出す。

「……しません。酔って気分が高揚したとしても、わたしは……誰とでもキスする女じゃありません」

「じゃ、何故俺には許した? 律子を助けるために……仕方なく受け入れたのか?」

「いいえ! ……あの、もちろん最初はびっくりしました。ただわたしは、律子さんを助けるためであっても、その場のノリでキスはしません」

「……なら、どうして? 俺に唇を奪われても、舌を入れられても、菜緒は拒まなかった」

柀生の柔らかくて、日本酒のフルーティな香りが残る舌を差し込まれた感触が甦よみがえってきた。菜緒の顔に血が集中して、火が出そうなほど火照ほてってくる。

「俺の籠たがはずれたって、途中でわかっただろ？ それでも嫌がらず受け入れたってことは、菜緒の気持ち俺に向いていると思っついのか？ 唇を塞がれてもいいと思うほどに？」

「そ、それは——」

菜緒は深呼吸みずかし、柀生の形のいい唇に視線を落とす。その時、もう一度彼と口づけを交わしたいと自らみずかが願っていることに気付いた。菜緒はうっとりと言まふたを閉じる。

「……はい」

想いを正直に認めた途端、菜緒の心臓こころが早鐘を打ち始めた。軀からだの奥深くが燃え、彼への想いが膨れ上がっていく。甘い匂においが軀を包み込み心地よさに、そっと目を開けた。菜緒の後頭部に添えられていた柀生の手が力が入り込められ、引き寄せられる。そして二人の湿った吐息が、唇の上でまじり合う。

「……っあ」

小さな声を漏らした時、菜緒は彼に唇を塞がれた。唇を開けると舌で舐められ、我慢できなくなつて開くと、彼の舌がぬるっと口腔こうくうに差し入れられた。歯列をなぞられ、舌を絡められ、上顎の裏を舐められる。巧みな舌の動きあかに抗えず、菜緒はされるがまま受

け入れた。

「っんう……んふあ」

柀生を誘う声が漏れる。あまりにも激しい彼の求めにくらうしてきた。だが意識は、大きく硬くなつて菜緒の下腹部を突く彼のシンボルに向けられる。それを生かした行為に移りたいと、彼が擦こすり付けてくる。さらに、彼の武骨な手は、我が物顔で菜緒の衣服の上を這い回った。そのたびに菜緒の軀の芯は焦げるような疼うずきに見舞われ、キスが深くなればなるほど手足の力が抜けていった。

「あ……んんっ！」

「菜緒っ……」

口づけの合間に、何度も名前を呼ばれる。菜緒は柀生に求められる幸せに酔い、いつしか冷静な判断ができなくなつていった。感じるのは、菜緒を貪むさぼり尽くす勢いの口づけ、軀を這う愛撫、そしてさらに先を望み押し付けられる彼の昂たかりだけになつていく。

「あ、はっ……んう」

柀生の手が、菜緒のセーターの裾すそを捲めくり上げ、シャツの中に忍んできた。冷たい手が柔肌をまさぐる感触にハツとなるものの、気付いた時には簡単にブラジャーのホックをはずされてしまった。あまりの手際の良さに驚いて逃げようとするが、いとも簡単に彼に組み敷かれてしまう。彼は菜緒のスカートが乱れていても気にせず双脚を両膝で挟み込み、